

街から本屋が消えていく！

悲痛な叫びが、この10年ほどの間、とくに耳に届くようになった。2000年に全国で2万1600店強あったのが、14年には1万4000店を割った（アルメディア調べ）。この14年で3分の1強の書店が消えてしまい、その動きは弱まりそうにもない。動物なら絶滅危惧種に指定されかねない事態だ。

毎日新聞（1月6日朝刊）は、「書店空白332市町村」と見出しをつけ、新刊本を扱う書店が地元のない自治体が、全国で4市を含む332市町村に上り、全体の5分の1になることを記事にした。町村はまだしも、仮にも「市」とつく自治体に、一軒の新刊書店もないとは！ 「本屋は地元の活字文化を支える存在であり、消滅は地方文化の衰退につながる」と、作家の阿刀田高氏が同記事で語る。

ことは書店だけの問題ではなく、酒店、雑貨店、喫茶店、精肉店など、町の商店街で普通に何十年も商売をしてきた店が、軒並み撤退を余儀なくされている。新幹線の止まるような都市の駅前商店街が、シャッター通りと化す無残な光景はもはや珍しくない。風景の変貌は、街の記憶さえも消し去ることになる。読書離れを憂えると同時に、そちらの懸念も大きい。

ネット環境の充実と拡大により、情報はたやすく無料で入手でき、電車内での空き時間はすべてスマホが食いつぶす。雑誌の売り上げはコンビニに吸い上げられ、電子書籍の影もちらついている。そのことに慣れた目には、書店消滅は痛くもかゆくもないだろう。私は「痛くもかゆくも」あるから大いに憂えるのだ。

本を読む喜び（よろこ）び、また買う楽しさを知った中学時代。私が住む大阪府郊外の小さな町に小さな新刊書店が1軒あった。脱サラで書店を開業した30代の男性店主は、私の読書指南役になった。「志賀直哉を読むんだったら、梶井基次郎も読んだ方がいい」「まだ少し早いけど、新潮文庫の文芸評論はいいものがそろっているよ」などと、行く度に話しかけられ、まだ濁らぬ目で、一冊、一冊と買いそろえたものだった。週に2、3度、書店の棚の前に立ち、どれを買うか迷い、ようやく買った一冊一冊の積み重ねが、今、書評をなりわいとする私の土台を作ったのだ。その店もいまはない。

町の書店は、大型書店のように「何でもある」にはかなわない。むしろ「これしかない」に徹することが生き残りの道ではないか。大型書店の激戦区、東京・神田神保町に老舗小型書店「姉川書店」が今も営業を続ける。ここは「猫の本、雑誌」の専門コーナーを作って、世の猫好きを喜ばせている。この店にしかない本を置くことで、わざわざ行く価値を生んでいるのだ。

自治体主導で、市の予算を捻出し、町に小さな書店を復活できないものだろうか。ネット書店では本を手にとることも、指先でページをめくることもできない。子どものころ好きだった本は、誰もが体で覚えている。書店の店主の甘みなささやきは、今も耳の奥で響いている。

おかざき・たけし

「サンデー毎日」などで書評を執筆。著書に「上京する文學」「読書の腕前」など。